

ラ ナ スン カ イ RANAH SUNGKAI 村 調査報告書

2004年12月8日

報告者 坂 井 美 穂

東京地方裁判所 御中

第1 調査の概要

2004年9月21日、Ranah Sungkai 村（ラナ・スンカイ）を訪れ、視察調査を行った。調査方法としては、まず Ranah Sungkai 村原告住民宅で、村落全体の状況を把握するために、住民数名から移転状況などに関する聞き取りを行い、続いて住民同行の下で現地視察を行った。

第2 調査結果

以下、住民からの聞き取り結果と現地視察結果に分けて述べる。

1 住民からの聞き取り結果

SUHAILI ZAIN 氏（スハイリ・ザイン、男性、原告番号0705）及び Ali Bungsu 氏（アリ・ブンス、男性、原告番号049）から聞き取りを行った。

（1）昔の村での生活状況

昔の村では、住民は恵まれていた。水田や農園を所有しており、作物も十分な収穫があった。村の農地は、土壌が良質で、また平坦であったため、農業に適していた。また、カンパル川が村の側を流れており、飲料水に困ることはなかった。マンディ（水浴）、洗濯、トイレも、カンパル川で用を足すことができ、何の不自由もなかった。

また、その川で漁業も営めた。美しいモスクや礼拝所なども住民の手で建設されていた。

（2）移転の過程について

1980年代、県知事の第1アシスタントから召集がかかり、イスラム系小学校でコトパンジャン・ダム建設についての話合がもたれた。その際、住民は住民の要望を聞き入れてくれるよう政府に要請した。

その後、政府からは、財産は補償します、ゴム園はちゃんとゴムの木がすでに収穫可能な状況で用意します、後はゴムの木を切るだけです、家屋は半恒久的な

ものを用意します、電気代は無料です、移転先では清潔な水が手に入ります、この移転で住民を苦しめることはありません、という説明があった。

1990年代初め頃になって、Bangkinan（バンキナン）で補償基準に関する会議がもたれ、住民の意向を無視して補償金額が決められてしまった。住民たちは、補償基準に不満があっても決められた補償金を受ける以外のことは出来なかった。

また、Pulau Gadang（プロウ・ガダン）村の住民が移転の際に、移転を拒んだため、その3、4日後、軍が来て強制的に移転させられたという話が当時の村（Batu Bersurat / バトゥ・ブルスラット村）に広まった。1990年代半ば頃に住民はRanah Sungkai村へ移転したが、Pulau Gadang村と同じことが繰返されるのを恐れたため、移転に反対することはできなかった。

（3）移転後の状況について

政府から与えられた家屋や井戸は大変質素なものだった。乾季になると飲み水すら手に入れることが難しくなった。電気については、無料という話だったにもかかわらず、設置料を支払わないと取り付けてもらえなかった。村道は未だアスファルト舗装されていない。

ゴム園にゴムの木は植えられていなかった。移転後5年たって、状況改善を求めて住民が州知事にデモを行った。その結果、ようやくゴムの木を政府から支給されたので、住民自身でゴム園を整備、植林した。現在は育てて4年になる。

政府から与えられた農園は傾斜地で農業に適していない。生計手段は不安定である。今は、新しいゴム園に植えられたゴムの木が育つのを待ちながら、水没しなかった昔のゴム園から収穫するなどして生活をやりくりしている。

（4）新しい村で思うこと

政府側から自分たちに用意された家屋は、床、屋根、壁、広さ、全てが人間の居住に適していなかった。住民は生活に困っているが、どうすればいいかも分からないままだ。住民たちの失われた権利が戻るように祈るだけだ。

（5）日本の裁判に対して望むこと

補償金支払いのプロセスに問題があったことは明らかで、それがもう一度見直され、やり直されるようになってほしい。また、現在の生活が苦しい住民を支援してほしい。最後に、もしできるならば、日本の裁判所や政府関係者には、実際にここに来て住民の様子を見てほしいと思う。

2 現地調査結果

聞き取りが終わった後、現地の被害状況を把握するため、AFITRI氏（アフイトゥリ、男性、原告番号021）、NASRIN氏（ナスリ・エヌ、男性、原告番号0479）の同行の下、視察を行った。結果は以下の通りである。

まず住民の現在の生活状況を把握するため、新しい村の様子を視察した。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)

Ranah Sungkai 村の様子は写真1の通りである。家屋は板張りで小屋のような作りであった。また、政府から用意されたという井戸(写真2)の中をのぞいて見ると(写真3)、ほとんど水がたまっていなかった。かろうじてたまっている少量の水は、最近降って溜まった雨水の残りであるという。すくってにおいをかいで見ると(写真4)、確かにほぼ無臭であったが、少し色が付き、なぜか油が浮いていた。今はここはめったに使用されていないということであった。



(写真5)



(写真6)

写真5、6は、住民の命をつなぐ水源である小川である。乾季であったにも関わらず、一定の水量があった。この小川では、視察の際、水浴び中の女性が数名いた。

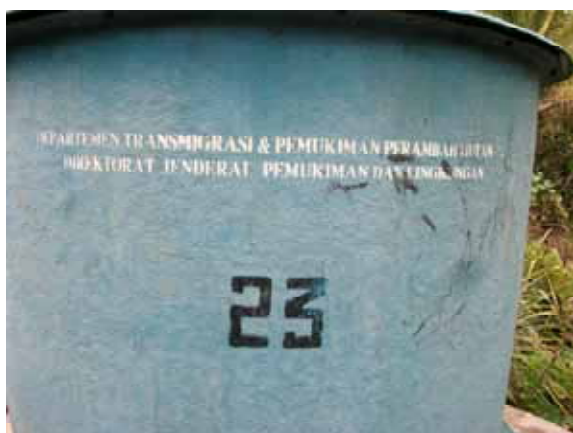


(写真7)

写真7は、その小川の上をかかす村道の橋である。移転前の政府の約束では、村道はこのような橋をふくめて、整備された恒久的なものが用意されるという約束であったが、実際には粗末なもので、度重なる住民自身の修復に関わらず、相当老朽化している。

こういった状況は、この Ranah Sungkai 村に限ったことではなく、橋のあまりのもろさを露呈するような事故も度々起こっている。例えば、物を運搬しているトラックなどが通って、崩れてしまうこともよくある。ちょうどこの付近で水浴びを終えた女性に話を聞くと、この橋は以前からこのような状況で、政府側が移転前に言ったことはウソだったと呆れながら話してくれた。

実際、報告者がこの橋を渡る際も、バイクの後部座席に乗せられていたが、危ない、という理由のためバイクを降り、歩いて渡らざるをえなかった程である。



(写真8)



(写真9)

2001年頃から政府の上水道設備プロジェクトが始められたということであった。そのプロジェクトによって、村の中に、水源からパイプをひいてタンク(写真8)数個が設置された。ところが、その蛇口の一つをひねったが水は出なかった(写真9)。このタンクには写真9のような蛇口が5つ程見受けられたが、蛇口自体が取り付けられていなくて、パイプのままになっているところもあった。

また、報告者自身がこのタンクをたたいてみたところ、明らかに水が溜まっておらず空であるような音がした。



(写真10)

写真10はRanah Sungkai 村落内の様子であるが、未だもって村道はアスファルト舗装されていないことが明らかである。雨が降るとこの赤土はぬかるみ、非常に通行が困難となるとのことであった。また、村道が勾配が多いため、村落内

の交通の便は悪い。

最近になって、ようやく道端に石が積み上げられ、村道の整備が始まったが、いつ終了するのかは住民には知らされていない。



(写真 1 1)

写真 1 1 は、集落内の村道沿いに建てられていた電灯である。同行してくれた住民の話では、この電灯が点いているところを、一度も見たことがないということであった。なぜこの場所に 1 つだけ、このような電灯が設置されたかは分からないが、回りを見渡しても、この設備に電力を供給する電線は見受けられなかった。



(写真 1 2)

写真 1 2 も Ranah Sungkai 村落内の様子である。この辺りは、政府から供与された農園である。この土地は傾斜地で農業には適さず、ほとんど作物は見当たらない。森林のままで、整備すらされていないところも見受けられる。

生活に苦しくて、こういった土地を他人に売却してしまう住民もいるとのことであった。



(写真13)



(写真14)

いったん村の集落を抜け、Lubuk Agung (ルブック・アグン) 村との境を示す辺りまでいくと(写真13)、Ranah Sungkai 村のゴム園が存在する(写真14)。非常に興味深かったのは、このゴム園はアスファルト舗装された公道(村道ではない)沿いにあったが、この公道沿いには、ゴムの木が植えられていたということである。

どういふことが同行の住民に話を聞いてみると、見栄えがいいように、あくまでも政府はちゃんと仕事をしたと見えるように、このような大きな通り沿いには道沿いだけゴムの木が植えられていたということであった。一歩そのゴム園の中に入ってみると、ゴムの木は育っておらず、雑草や他の木などしか見当たらなかった。

住民たちは、これが政府のやり方だと大変憤りを感じている様子であった。

以上